

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します



合田 直弘

豪州出身で、現在は香港を拠点に騎乗しているザカリーザック・パートン騎手（35歳）が、今月のこのコラムの主役である。

なぜこのタイミングで彼を取り上げるのか。7月15日にシャティン競馬で行われる開催をもつて香港における17／18年シーズンが閉幕するのだが、この原稿を書いている6月半ばを迎えて、ジョアン・モレイラ騎手（34歳）と激烈なリーディング争いを展開しているのが、ザック・パートンなのである。

16歳だった99年に騎手デビューを果たしたザックは、まだ見習いの資格を有していた02／03年シーズンにブリストン地区のリーディングを獲得し、乗れる若手として脚光を浴びることになった。その後シドニー地区に移動し、06年4月にG・ウオルター厩舎のエキサイツに騎乗してサイヤーズプロデュースを制しG1初制覇。翌06／07年シーズンには年間116勝を挙げてシドニー地区リーディングの6位に躍進している。

07／08年シーズンから香港に移籍。10年1月にP・オサリヴィアン厩舎のフエローシップでHKG1スチュワーズCを制し、香港におけるメジャーレースを初制覇。その年の6月に、そのフエローシップで安田記念に参戦し、日本での初騎乗を果たしている。

11／12年シーズンに年間62勝を挙げ

てリーディング2位に躍進し、続く12／13年シーズンは勝ち星を88勝まで伸ばして、再びリーディング第2位に入っている。そのシーズン途中だった12年12月には、阪神を舞台としたワールド・スーパー・ジョッキーズシリーズに初めてアジア代表として参戦し、2勝を挙げて初出場初優勝の快挙を達成している。

そして、年間112勝を挙げ、ついに香港リーディングのトップに躍り出たのが13／14年シーズンだった。これが実は香港競馬界にとって結構な事件で、なぜなら、前季から遡ること実に13シーズンにわたって、香港リーディングの座はダグラス・ホワイトが独占していたのである。

絶対王者ホワイトをトップの座から引きずり下ろしたザックは、14年10月には日本調教馬アドマイラクティに騎乗して祖国豪州のG1コートワールドCを制覇。15年3月には香港調教馬エアロヴェロシティに騎乗しG1高松宮記念に優勝。香港の第一人者に相応しいグローバルな活躍を見せ、今後しばらくは彼の時代が続くかに見えた。

だが、その14／15年シーズンのザックは、年間95勝とまことに成績を挙げたものの、リーディングは2位に留まった。このシーズンから、マジックマンの異名をとるブラジル出身のジョアン・モレイラが香港を拠点にくるようになり、ホワイトが持つていた記録（114勝）を大幅に更新する

年間145勝の新記録をマークし、断続の成績でリーディングの座を奪取したのである。マジックマンの勢いは凄まじく、15／16年シーズンは年間168勝で、2位ザック（80勝）をダブルスコアで退けて圧勝。そして17／18年シーズンも171勝を挙げ、2位ザック（107勝）に64勝という大差をうけて、ぶつちぎりで3年連続リーディングの座に就いたのだった。

ところが今季は、モレイラが前3季に比べると勝ち鞍を減らす一方で、ザックは順調に勝ち星を伸ばし、それでも、4月末の香港チャンピオンズデイを終えた段階では、モレイラ99勝に対しザック92勝とモレイラが7勝リードしていたのだが、そこからザックが猛スパート。6月3日の開催を終えた段階で、モレイラ116勝、ザック113勝と3勝差まで迫ったところで、モレイラが開催2日の騎乗停止処分を受け、6月6日と10日の開催を欠場。この間、ザックは6日に2勝、そして10日にも2勝を挙げ、この段階で今季の勝ち星を117としたザック・パートンが、ついにジョアン・モレイラを逆転したのである。

この会報が皆様の御手元に届くのが6月末として、7月15日のシーズン終了までは5開催、45競走が組まれている。名手二人の争いが果たしてどのような結果を迎えるか、固唾を飲んで見守ることになりそうだ。